まとめとして

黒柳孝夫
〈短期大学部教授〉

「大学史」の授業は2006年度から豊橋・名古屋の両校舎で開講されたものである。2007年度私はたまたま教学担当副学長の任にあった関係から、本講義の企画・まとめ役を務めた。ただ毎回の講義には東亜同文書院記念センターの佃隆一郎研究員にコーディネーターと運営をお願いした。

授業はコーディネーターのもとに現職の教員のほか、元教員・卒業生も担当するといったリレー講義である。受講生（名古屋校舎）の感想文にも「毎回、様々な講師の先生方のお話を聞くことができ、変化に富んだ講義内容でとても興味深かった。愛大の卒業生の方が講師になられた回では、大先輩として今とは大きく異なる愛大の様子を教えていただいた。また通常の講義では受けられない他学部の先生の講義を受講できた。これは総合科目という分野ならではだと思う」とあるように、担当者の熱意と授業に対する取り組みが学生達にも好感をもって受け止められたようである。授業担当者に、まず感謝を申し上げたい。

2007年度「大学史」の授業のテーマ・目標は次のように掲げた。

「諸君が入学した“大学”とはどのようなところだろうか。大学の意味や、その社会的な存在意義を知るためには、大学全体の歴史を知るのが近道である。教育機関の中で、最古の歴史をもっている“特殊な学校”である大学について、まず大学の起源と西洋での大学の歴史を考えよう。次に日本の近代化の過程の中で、大学が設立されるまでの経緯とその役割を理解しよう。愛知大学は敗戦直後の1946年に創設されたが、それから61年、この大学にも様々な出来事や変革があった。その歴史を実際の体験談も交え、具体的に見ていくことにしよう。

この講義は、日本や世界の大学全体の歴史にも目を向けながら、諸君が所属しているこの大学の生きた歴史と現状での課題、それから将来への展望を理解してもらい、さらにはそこから学ぶことの意味や大学生活の意義を発見してもらうためのものである。」

授業の内容と担当者は次のとおりである。豊橋校舎と名古屋校舎の講義内容は同じである。

1．はじめに　佃　隆一郎氏
2．中世ヨーロッパにおける大学の起源　北嶋　繁雄氏
3．ドイツにおける近代大学の誕生と展開　河野　眞教授
4．アメリカにおける近代大学の展開　太田　明教授
5．日本における旧制大学の歩み　大島　隆雄氏
6．“本学の前身”東亜同文書院の歩み　小崎　昌業氏
7．愛知大学キャンパスツアー　佃　隆一郎氏
8．愛知大学、創設の経緯　今泉潤太郎氏
9．戦後の学制改革　田子　健教授
10．「愛大事件」とは何か　豊島　忠氏
11．薬師岳での山岳部遭難事故　山田　義郎氏
12．大学紛争と大学改革　武田信照学長

13. 経営体としての愛知大学　堀　　彰三教授
14. まとめとして　　黒柳　孝夫教授

テキストは愛知大学小史編集会議編『愛知大学小史』梓出版社を用い、写真などのビジュアル教材も積極的に活用された。

私の担当授業「まとめとして」は、両校舎とも本授業のねらいとその流れのおさらいをし、その後、「大学史を受講し最も印象に残った内容と考え」を受講生全員に３分間スピーチの形式で順に発表していただいた。学生達の講評では「あまりの突然で驚いたが、他の人の考えや感想が聞けてとてもよかった」と書いてくれた。学生達の真面目な発表が授業を充実したものにしてくれたと思う。

大学も21世紀に入り、大学全入時代を迎えている。学生の質や入学動機も様々である。大学は社会から独自性・公共性を求められている。入学してきた学生の学びの目標や意欲を見失わせないためにも初年次教育は大切である。様々な動機付けの一つに大学の歴史や伝統、教学の指針を学びあうことの意義は大きいものと考える。

人間は何をきっかけに自身の立ち位置、将来の展望を発見するかわからない。高等学校までの学校と家庭中心の消費者型の生活、受験勉強中心、読書量の寡少さ、過度の情報では自らに問いかける時間が少ないのが現状である。自分自身の情報を客観化する機会も少ないと言わざるをえない。

試験問題は豊橋・名古屋校舎とも「大学史で学んだ授業の中から各自テーマを設定し、まとめてみなさい」というものであった。学生のえらんだテーマを項目別に豊橋学生分で整理すると次のとおりであった。薬師岳事故26名、愛大事件18名、大学史全体15名、本学創設５名、ドイツの大学５名、米国の大学３名、教育改革２名、大学紛争２名、全入時代２名、大学経営１名、その他、である。この傾向は名古屋学生分も同様である。その中の答案を紹介する。

「薬師岳遭難事件について」（原文のまま）

私はこの大学史の講義を受けて、印象深かった出来事などが数多くある。この愛知大学に長い歴史があり、素晴らしい出来事や、痛ましい出来事など様々なことがあった。一つ一つに印象深いものがあったが、私にとって最も印象深かったものは、1963年１月３日の薬師岳遭難事故である。富山県の北アルプス薬師岳で愛知大学山岳部の冬山合宿に参加していた13名が遭難し、全員が死亡するという非常に痛ましい事故であった。当時の本間喜一学長の「生命は地球より重い」という言葉を基本として、全学をあげて救援・捜索活動を行った。救援・捜索活動を行うにあたって、13名全員が絶望したと認められるに至ったとして父兄へのお詫びや多くの方に多大な迷惑をかけたことなどを理由に、１月26日に本間喜一学長は辞表を提出した。本間学長の「天災地変にも責任を負う」という言葉は、広く社会に「責任論」についての議論を呼び起こし、学内に辞表撤回の声もあがったが、２月17日に辞任が承認された。救援・捜索活動は１月15日から５月７日まで四期に分けて行われたこの間に11名の遺体は発見されたが残る２名の遺体の手がかりがつかめず、対策本部としては組織的かつ連続的な捜索は10月15日を限度として打ち切り、後は山岳部や遺族による自主的捜索になった。10月に入り、奇跡的に残る２名の遺体が我が子を思う父親によって発見された。1995年６月に山岳部員13名の33回忌法要が行われた。この日の法要をもって愛知大学としての薬師岳遭難事故の公式な行事は終ることになった。私はこの遭難事故に対する本間喜一学長の行動や言葉に非常に感動した。常に学生のことを一番に考える学長だと思った。本間喜一学長の「生命は地球より重い」という言葉を大切にして、二度とこのような痛ましい事件が起きないようにしなければならないと感じる。また、今生きていることに感謝しながら、今やれることを全力でやって、本間喜

一学長のような素晴らしい人間になりたい。

「二大事件から得た愛知大学の精神」

（原文のまま）

まず、私がこの講義を受けることにした理由を述べたいと思う。それはまだ私が愛知大学へ入学するか迷っていた時のことだ。両親や祖父母が「愛知大学は歴史のある学校だから知らない人はいない」と言われた。後に入学を決めた時、その「歴史」という言葉に惹かれたと思う。そして時間割を考えた時、父に「大学史を受けて自分が4年間過ごす学園を知って来い」そんな言葉がきっかけだった。私が14回の講義の中で特に心に残ったのがやはり「愛知大学事件」そして「山岳部の薬師岳遭難」の二つである。まず「愛知大学事件」について、愛知大学事件は1952年5月7日深夜、愛知大学豊橋キャンパスに立ち入った理由・意図不明の制服警察官2名と学生との間に生じたいざこざが端を発し、「大学自治と警察権」についての問題が司法判断の必要となる刑事裁判まで発展した事件である。「学園内の自由を守るための行動」と「公権力の思想言論の調査取締り」が真っ向から対立した「大学自治」をめぐる典型的事件であり、愛知大学の主張の正当性が認められた事件でもあった。これは最高裁判所の判決を得るまでに21年もの歳月を有したのであった。時期が同じくらいであった東大ポポロ座事件、早大事件と学園内を舞台とした三大事件として注目を浴びたものであった。次に「山岳部の薬師岳遭難」について。1963年1月3日、富山県の北アルプス薬師岳で愛知大学山岳部の冬山合宿に参加していた13名が遭難、そして全員が死亡するという最悪な事態に陥ってしまった痛ましい事故だ。当時の学長本間喜一の「生命は地球よりも重い」という言葉から教員、学生達が一丸となって救援捜索をした。折からの三八豪雪で難航する死体の発見、朝日新聞社の記者がヘリコプターで山小屋に強行着陸をしたが、「来た、見た、いなかった」と報じた。時間が経ち11名の遺体は発見されるものの、残りの2遺体が見つからない。しかし、発見されない我が子を何が何でも見つけると父親が山登り未経験ながら6度も登山し、探し続けた結果、2遺体を発見することができた。それは捜索打ち切りの直前のことだった。心を痛める事件だった。私がこの二つの事件を通じて言いたいのが、まず当時の学長であった本間喜一氏の態度である。愛知大学事件の時は、司法の場で堂々とした紳士的態度、そして薬師岳遭難の時は素早い対応と、そして「天災地変にも責任を負う」と言い、辞職した姿。この人がいなければ今の愛知大学は存在しなかっただろう。そしてもう一つは本間喜一学長を先頭として教員・学生が一丸となって学園に尽くしている所である。中国上海で始まった東亜同文書院から戦後豊橋へ愛知大学とし、そして今に至る60年の間にいろんな事件が起こったが、特に「愛知大学事件」「薬師岳遭難」を風化させてはいけないし、同時にこの裏では本間喜一氏、愛知大学教員・学生の姿があったからこそ今もここに愛知大学があることを忘れてはならない。そしてその精神を受け継いで私達は大学生活を満喫すべきであると思った。

薬師岳の山岳部遭難事故、愛大事件での本間名誉学長の対応が最も学生達に印象深く受け止められたようである。

「大学史の授業を受講した感想をまとめてください」では、次のようなものがあった。

愛知大学に入学してから大学の歴史について知ることは、まったくありませんでしたが、半年間の授業や豊橋キャンパスツアーを通して、長い愛知大学の歴史を学ぶことができて、本当によかったです。特に豊橋キャンパスツアーでは実際に歴史ある豊橋校舎へ行って、

愛知大学東亜同文書院記念センターの中を見学したりして、授業では学べないことがたくさんあり、自分が通う大学について誇りを持てるようになりました。

上記感想文にもあるように、今年度から名古屋校舎の学生達にも豊橋校舎キャンパスツアーを実施できた。それは大学の歴史を目と耳、そして肌で感じて欲しかったからである。キャンパスツアーの最後に重厚な雰囲気の漂う愛知大学記念館の前で応援団の皆さんから見学の学生達にエールを贈っていただいた。ささやかな企画かもしれないが、このことから愛知大学に学ぶ学生としての自覚、両校舎の学生達との間にあらたな友情と絆が生れればと考えたからである。

学生達は両校舎とも真剣に受講した。答案も「持込物不可」であるにもかかわらず、たくさんの内容を書いてくれた。授業の内容や講義方法の改善はこれからも怠ってはならないが、この「大学史」という科目が今後ますます充実し発展していくことを願わずにはいられない。学生の答案からそのことの意味をますます感じた次第である。